

弘末：それでは、早速最初のご発表に入らせていただきます。最初のご発表は高藤洋子さんですが、立教大学アジア地域研究所特任研究員でいらっしゃいます。高藤さんは長い間インドネシアにご滞在され、貴重な経験を積まれました。その中でニアス島や北スマトラのシムル島の防災文化ならびに防災についての活動にも関わられ、それらについて本日はお話をいただくことになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

高藤：ただ今ご紹介に与りました高藤洋子です。本日はよろしくお願ひ致します。

最初に、本研究は2011年度および2012年度公益財団法人サントリー文化財団『人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成』、また第41回（平成24年度）公益財団法人三菱財団『人文科学研究助成』を受けていることをお伝え致します。

当研究の中で、伝承が防災教育に果たす役割についての調査、また実証的研究には公益財団法人サントリー文化財団の助成を活用しました。また、シムル島における津波伝承「Smong（スモン）」の歴史や、ニアス島における伝統的な石文化、また日本の津波碑など歴史にまつわる災害文化の調査については、公益財団法人三菱財団の助成を活用致しました。今回の発表は、その研究成果の一部です。研究グループを代表して両財団に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて、東日本大震災から2年2か月が経ちました。阪神淡路大震災からは18年が経ちました。そして、本日私が発表致しますスマトラ沖地震・インド洋大津波の発生からは間もなく8年半が経とうとしています。皆さんはこれらの災害のことをどれだけ覚えておられるでしょうか。時が経つにつれ常に問題となるのは記憶の風化です。様々な災害が発生するたびに、「過去の教訓が活かされなかった。」「あのかの対策は何だったのか。」というような報道がなされます。巨大地震や大津波などは発生周期が長いため、次の発生時には世代が替わっているということも考えられます。時間が経過するにつれ、思い出したくもないという意識も手伝って、人々の間で防災の意識が薄れつつある面もあります。忘れるということは人間が本来持っている性質であり、記憶というものは風化していくものとも言えます。

では、防災・減災の方法をどのように「日常の中で」考え取り組んでいったらよいのでしょうか。今日は、2004年12月に発生したスマトラ沖地震・インド洋大津波、以降は「スマトラ沖地震大津波」と表現させていただきますが、そこから得た教訓を報告し、皆様とともに災害文化を通して防災・減災について考えていきたいと思っております。

スマトラ沖地震大津波では、20万人を超える犠牲者が出ました。2004年12月26日、今から8年半前の出来事になりますが、スマトラ沖

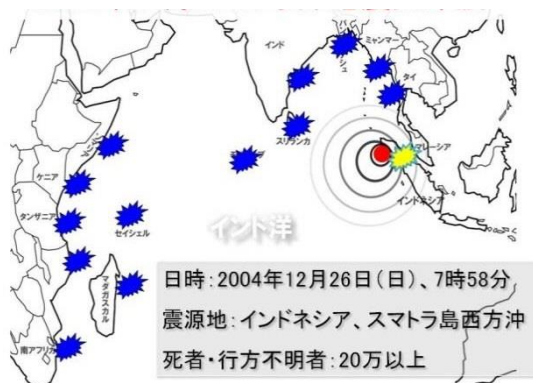


図1 2004年12月スマトラ沖地震大津波
〔鈴木佑記 作成〕

でマグニチュード 9.1 の地震が発生しました。地震は大津波を引き起こし、「**図 1**」からもわかるように、その被害はマレーシア、タイ、スリランカ、インドなど東南アジア、南アジア地域の他、アフリカ諸国にまで及びました。地震、津波による死者、行方不明者は推定で 20 万人以上と言われ、最も被害が大きかったインドネシアでは、死者、行方不明者は約 17 万人に及びました。

さて、そのインドネシアは日本から南へ約 5,000km、赤道直下に位置します。総面積は 189 万 km² で日本の約 5 倍になります。赤道に沿った東西 5,100km、南北 1,900km の範囲に約 13,700 の島々がある諸島国家です。総人口は約 2 億 2,800 万人です。国の特徴として、国民の約 90% がイスラム教徒ということが挙げられます。スマトラ沖地震大津波の様子は、毎日テレビでも報道されましたので、皆様も記憶に新しいことと思います。

写真 1 は私のフィールドとなっているアチェ州のシムル島の被害の様子です。シムル島は離島であるため、被災状況はテレビなどで伝えられることもありませんでした。情報を得るのが難しかっただけに、被災当時スマトラ本島に住む人々の間では、シムル島は沈んでしまったと噂されていたほどでした。

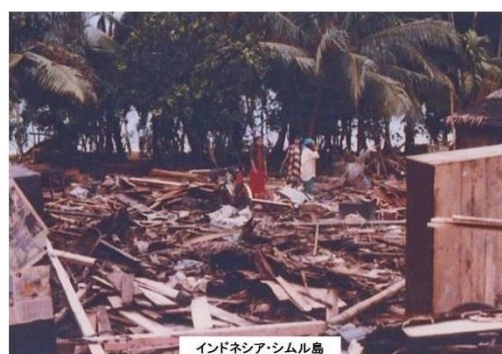


写真 1 2004 年 12 月
スマトラ沖地震大津波被災地(2005 年撮影)
〔資料提供 : Ir.Sukoco Erwan HK〕

2004 年 12 月 26 日のスマトラ沖地震大津波をはじめとして、その後も続いたインドネシアの災害はインドネシアに大きな損失を与えました。人々の間では強力な防災制度が必要であるとの意識が高まり、インドネシア政府は国、州、

県、市全てのレベルにおける防災制度の具体化を目指しました。そして、2007 年 3 月末に「インドネシア共和国防災法」が制定されました。その第一目的は、「インドネシア国民とその国土を災害から守ること」とされました。このような法令整備に伴い、インドネシア国内の防災教育も徐々に普及し始めましたが、予算の面で今なお課題を残しています。

先ほどもお伝えしました通り、インドネシアでは 2004 年の地震と大津波で非常に多くの犠牲者が出ました。アチェをはじめ、ニアス島で地震や津波の被害に遭った多くの人々は、「地震が起きると津波が来るかもしれない」ということを全く知らない人が多かったのです。津波の発生に備え高台へ避難するどころか、津波発生前に起こる「潮が引く」という現象でたくさんの魚が跳ねるのを見て、喜び勇んで子どもたちをはじめ大人たちも一緒になって、ザルを持って魚を捕りに沖へ沖へと出て行ったのです。そこへ突然大津波が押し寄せました。そして、多くの尊い命が犠牲となりました。人々の間には防災意識が浸透していなかったのです。

様々な情報が行き交う中で、インドネシアで唯一、犠牲者が少ない島があることを知りました。それがシムル島です。アチェ州の州都バンダアチェや北スマトラ州ニアス島で多くの犠牲者が出たのに対し、スマトラ島南西に位置するシムル島では、同様の津波にもかかわらず犠牲者は 7 人でした。その原因を調べているうちに、2004 年のスマトラ沖地震大津波においてシムル島での犠牲者が非常に少なかったのは、1907 年に発生した地震と津波の災害経験が 100 年もの間「Smong」という言い伝えとなって語り継がれ、住民が避難方法を知っていたためだということがわかりました。インドネシアの人々はそれを「Smong の奇跡」と言っています。

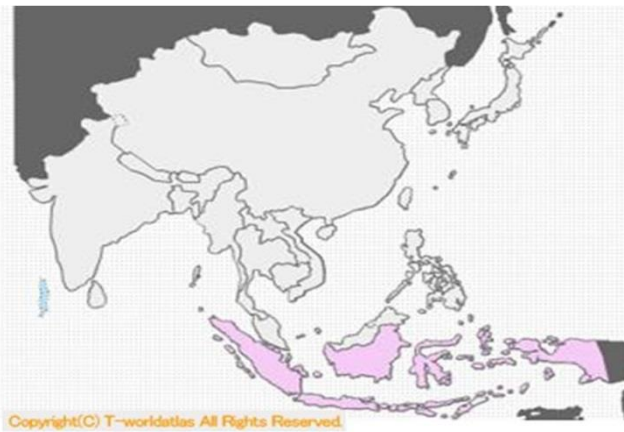


図2 インドネシア全土

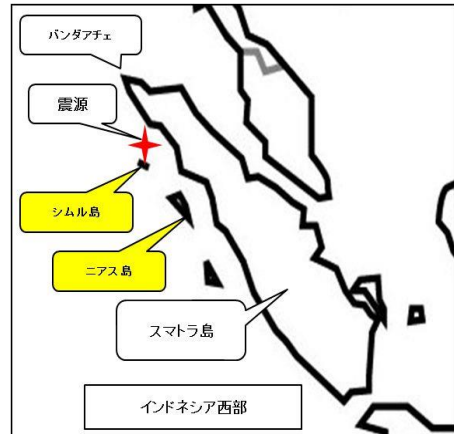


図3 スマトラ島北部

【世界地図 | SEKAICHIZU】を基に報告者作成

まず、シムル島の位置から確認していききたいと思います。図2で、赤で示した部分がインドネシアに当たります。さらにスマトラ島の北部を拡大したのが図3になります。シムル島は、スマトラ沖地震の震源地からわずか60kmのインド洋に浮かぶ島です。面積や人口などシムル島の概要は、資料1にまとめてありますので、ご覧いただきたく思います。1907年にこの地域で発生した地震と津波では多くの方が亡くなっています。そのときの災害を教訓に、シムル島では大きな地震があったら高台へ逃げることを教える「Smong」という言い伝えができました。

本日のシンポジウムのテーマとなっている「災害文化」ですが、これは災害が多い地域において、人々が地域を守るために経験に基づき伝承してきた知恵や技術のことを指します。シムル島における「Smong」は、まさしく長い歳月をかけて醸成されてきた災害文化です。シムル島の住民に行ったアンケート調査の回答者88%が「Smong」を知っており、72%がスマトラ沖地震大津波発生時に、まずそれを思い出したと答えています(図4)。地震発生後すぐに、両親から、或いは祖父母から教わった「Smong」のことを思い起こしていました。やがてやって来るだろう津波の前兆を誰もが早くに察知していたのです。人々は一目散に高台を目指して避難しました。

資料1 シムル島の概況と被害状況

- ・総面積約 1,800 km²
- ・総人口約 78,000人 島民のほぼ100%がイスラム教徒
- ・地場産業 農業(丁子、カカオ、ココナツ、天然ゴム、胡椒など)
漁業(カツオ、エビ、ロブスターなど)
- ・三大伝統文化
「Nandong(ナンドン)」古くから伝わる叙事詩。四行詩「Pantun」の形態をとる。
「Nanga-nanga(ナンガ・ナンガ)」古くから伝わる鎮魂歌であり哀調を帯びた詩歌。
「Sikambang(シカンバン)」島独特の伝統舞踊。四行詩(Pantun)が歌われている。
- ・被害状況 死者7名、負傷者88名、避難者53,541名、倒壊家屋14,539戸、
損壊教育機関889件、道路損壊101件

資料1にもありますように、シムル島には古くから残る伝統文化があります。それらが活用され、伝承は廃れることなく島の人々の間で受け継がれてきました。シムル島に昔から伝わる歌の多くは「Nandong (ナンドン)」と呼ばれる叙事詩です。

「Nandong」は通常、集会で歌われることが多かったのですが、その美しい響きが家庭に持ち帰られ、子守唄として歌われたとも言われています。シムル島の住民たちは、この

「Nandong」を人生の節目とされる結婚式などで歌ったりするとともに、日常の田畑仕事の休憩時に、また漁業に携わる者は漁の際に口ずさんだりしました。さらに、丁子やココナッツの収穫の際に歌ったりしています。

「Smong」は、同じシムル島の中でも地域や村によって異なる歌詞となっています。資料3を例に挙げて私の解説をお伝えしたいと思います。「Smong」は四行詩「Pantun (パントウン)」の形態をとっています。読み返すことのできる文字がなかった時代には、コミュニケーションの媒体として唯一存在した話し言葉、或いは語り言葉は耳から入りすぐに記憶に残るように、聞く者にとって強烈な印象を与える必要がありました。

資料3にありますように、この歌の始まりには「津波…それは君たちの水浴びの水」、「地震…それは君たちのゆりかご」、「雷…それは君たちの太鼓の音」、「稲妻…それは君たちのともし火」というように、類似したフレーズが4回繰り返されています。「Smong」のシムル語の部分もご覧ください。そのフレーズには、結語として「dumek mo」、「uwak mo」、「keudang mo」、「suluh mo」という4つの単語が使われていますが、全て語尾が「o」で揃えられており「韻」を踏んだ構成になっています。句の語尾に規則性を持たせる「押韻」によって人々の記憶の中に留まりやすいよう工夫され、長い歳月がたった今もお受け継がれています。「押韻」は1つのパターンとして記憶に残るといった特徴があります。その次の4つのフレーズの結語は「surito」、「semonan」、「fano」、「sesewan」とあるように、語尾には「o」と「an」が交互に配置されています。このような「押韻」の繰り返しによって、歌は耳から心、そして脳裏へと記憶されていったのです。

また、「津波」、「地震」、「雷」、「稲妻」などの災害を「水浴びの水」、「ゆりかご」、「太鼓の音」、「ともし火」という日常慣れ親しんだものに結び付け語り継いでいくことによって、「災害が発生しても慌てることはない、何も恐れることはない」と、パニック状態に陥らないように諭しています。その他、「揺れ動く地震に続いてやってきた、とてつもない大きな波」、「あつという間に」、「村は海の底に沈んでしまいました」など、わずか3フレーズで津波の惨状を描写しています。また、『とにかくまずは』高いところを探しましょう」というように、危機が迫っていることを感じさせます。歌を聞いた人がそのイメージを膨らませることによって、さらに鮮明な記憶として残っていきました。

「Smong」には、韻を踏む詩に加え心に残る美しいメロディーが備わっています。それは老

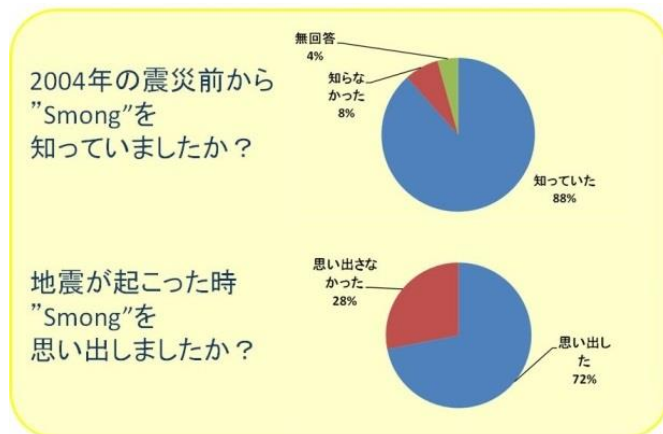


図4 シムル島住民へのアンケート

人から子どもまで誰もが親しみ口ずさむ美しいメロディーです。後ほど皆さんに「Smong」のメロディーをお聞きいただきますが、歌の盛り上がり部分では、「もしも強い地震が来たならば…」、「海の水が引いて行ったならば…」、「とにかくまずは高いところを探しましょう」、「自分達の身を守るために…」という歌詞が何度も繰り返され、最も大事な部分を伝えています。つまり、繰り返しによっても記憶に残るように工夫されているということです。

「Smong」には「語り言葉」が用いられていることもひとつの特徴として挙げられます。1907年の津波が発生した時代には、人々にとって分かりやすく理解しやすい「語り言葉」は、情報を正確に伝えるため何より大切なものでした。その「語り言葉」が用いられたからこそ、「Smong」の言い伝えはシムル島全島に広まっていったのだと考えています。

東日本大震災が発生した2011年3月11日から5か月後の2011年8月に私がシムル島に渡った際には、村の住民から、資料4にあります「PANTUN NANDONG SMONG」を日本の皆さんに伝えてほしいと託されました。この歌は、遠く離れた日本の人たちへの「頑張っ」というメッセージでした。村の人々は東日本大震災をわがことのように考え、自分たちの後世にも伝えていきたいと話していました。

この歌詞についても少し解説をしたく思います。聞き取り調査からは、「辺りの風が凩ぎ鳥の姿が見えなくなったらそれは地震の前兆」また、「井戸の水が引き、海岸で水浴びをしている水牛が陸に上り丘に向かって動き始めると地震に注意」など、多くの住民が地震の前に起こる自然現象を先祖から受け継いでいることがわかりました。これらの証言は、この歌詞の中にある「周りが静かになり地震が起こりそうな気配です」の部分に裏付けています。

また、歌詞にある「タンゴ・バシにあるシバウ山」というのは、シムル島で一番高い山ですが、「地震が起こったときには、私たちはシバウ山のような高台を目指して避難しなければなりません」というように発信されています。このようにして、シムル島では先人たちの災害経験が代々受け継がれてきました。

4番目の歌詞に出てくる「2011年には日本で津波がありました」、「多くの人がとても苦しみました」の部分は東日本大震災を指しています。アンケート調査では、災害経験を共有したいとの声が多く聞かれました。

その他にも防災に関しての教訓が歌詞の中に多く盛り込まれています。例えば、津波の際に防波堤の役割を果たすと言われていたマングローブについて述べられています。最後には自然とともに生きることの大切さ、神への祈りが歌われています。シムル島の人々は、自分たちの暮らしが豊かな自然との共生、また神への祈りによって支えられていると認識しています。

まとめますと、シムル島の人々は、津波災害の経験「Smong」を後世に残していけるように「押韻」の手法をとり、緊迫感、臨場感のある「語り言葉」を用い、分かりやすくかつ記憶しやすいように様々な工夫をしました。その結果として「Smong」が100年もの間、伝承されたと言えます。また、子守唄や田畑仕事、漁の合間など日常生活の中で防災を意識することが多かったのも伝承が風化しなかった大きな理由のひとつだと考えます。日常の中にいかに防災についての意識を取り入れることができるかがポイントだと思います。先人の経験、また地域や子孫を守るための先人の知恵や技術を用いて防災を意識し、災害時の対処法を身に付けることは、これから先の時代、異なる地域へも積極的に伝えていくべきであると考えています。

さて、今まではシムル島の話でしたが、ここからは場所が変わり、ニアス島での研究および活動について報告を致します。ニアス島ではほとんどの人が、地震後に津波が起こる可

能性があるということを知らなかったため、2004年のスマトラ沖地震大津波では多くの犠牲者が出ました。そこで、先ほどお伝えしたシムル島での調査や研究結果を発展させ、ニアス島で新しい取組みとして研究を始めました。ニアス島の概要につきましては、**資料2**をご覧ください。

資料2 ニアス島の概況と被害状況

・総面積	約 5,600 km ²
・人口	約 716,000 人 島民の約 8 割がキリスト教徒
・地場産業	観光業、漁業、農業
・文化的特徴	男子の成人儀礼である石飛び“Lompat Batu (ロンパッ バトゥ)” 各戸の庭に石碑を配するユニークな「石文化」 高床式の木造伝統家屋群 “Omo Hada (オモ ハダ)”
・被害状況	死亡者 685 名、負傷者 3,277 名、行方不明者 1 名、避難者 12,739 名 倒壊家屋 24,739 戸、損壊教育機関 520 件、道路損壊 1,409 件

図3にありますように、ニアス島はシムル島に隣接しています。すぐ隣にある島ですが、シムル島とは対照的にスマトラ沖地震大津波で甚大な被害がありました。シムル島の「Smong」に見られる特徴に着目し、このニアス島では同島に古くから残っている伝統的なメロディーを活用した防災の歌を創作し普及することを考えました。歌やダンスなどを主体とした手法であればインパクトもあり、その創作の過程においてコミュニティの活性化も期待できると仮定しました。

そこで、ニアス島全島において防災歌創作についてアンケート調査を行い、その結果に基づき住民との話し合いを重ねました。災害文化を醸成する拠点としては、人々が集まりやすい学校を第一に考えました。これまでのニアス島での経験から防災教育を実施するにあたり、特に学校が大きな役割を果たすと考えました。児童たちは家に戻り、その日に学校で教わった内容を、「今日は学校でこんなことを教わったよ」と家族に話をします。そのことによって、家族もそれらの知識や情報を得ることになります。さらに、その家族が近所の方々に話を伝えることにより、知識や情報がコミュニティ全体に広がっていくということに着目しました。

ニアス島の長い歴史の中で育まれてきた伝統文化のひとつに、一度踊ると忘れられないリズムミカルな踊り、「Maena (マエナ)」があります。本研究は、このニアス島において住民が災害の記憶を風化させず災害経験を次世代に伝承していく手法として、日常人々に親しまれている「Maena」、伝統文化に着目しました。防災の歌作りには、現地の学校の先生方と児童、生徒たち、また PTA を初め、コミュニティの皆さんにも参加していただきました。歌詞を考える段階で、既に防災知識の広がりや防災意識の向上が見られました。親子で防災について話し合う機会が増えたとのアンケート結果も出ています。

そしてそれぞれの学校で、オリジナルの防災歌とダンスが創作されることになりました。昔からある伝統歌のメロディーにあわせて防災知識や災害に遭った際の対処法が盛り込まれた歌詞が作られました。それらの歌詞の一例を挙げますと「地震が起きた時には安全で快適な所を探しましょう」、「家にいる時も学校にいる時もすぐに避難しましょう」、「海岸近くにいる人はみんな注意しましょう」、また「より高い所に逃げましょう」などです。さらに、「地震が起こったその時に、もしも調理をしていたなら、安全を期して火を消しましょう」と、歌の中には

災害発生の際に注意すべきことや対処法が数多く盛り込まれています。後ほど皆さんに、この「Maena」を用いた防災歌とダンスを動画でご覧いただきたく思っております。

この防災歌とダンスで、児童たちは楽しく防災知識や対処法を学ぶことになりました。防災歌を創作した学校では成果発表会を行い、創作途中の学校ではその様子を映したビデオを放映し、防災についての知識や対処法の授業を行いました。ビデオを見つめながら楽しそうに防災歌と一緒に口ずさんでいるその様子を見て、この方法であれば防災教育がごく自然に日常の学校生活に溶け込んでいき、息の長い防災教育を実施していくことができるのではないかと実感しました。

これまで述べてきた防災歌とは別に、災害文化を醸成するための第二段階として、ニアス島に古くから残る石文化を防災に活用することが有効ではないかと仮定し、石造物に教訓を刻むことを計画しました。石文化が息づいているニアス島では、地域住民が創作した防災の歌を石造物に刻んで普及することは他の地域に比べて後世に伝わる効果が大きいと考えました。石碑あるいはそのモニュメントのデザインは、その土地に残る昔からの石像などをヒントにしました。

ニアス島の石文化の代表として挙げられるのは、Lompat Batu（ロンパッ バトゥ）と言われている石飛びの文化です（写真2）。ニアス島南部の青年たちは、幼少の頃からこの石造りの飛び台を越える練習を始めます。村と村との間にある塀を乗り越え、戦いを行うための訓練が発端とされていますが定説はありません。ニアス島南部の多くの村には、現在もなお、広場や石畳には装飾を施された大きな石像や石塔が立ち並びます（写真3）。これは先祖の記念碑でもあり、祖先の象徴として家の前の両脇に建てられています。対となっている石像には「和解」という意味合いがあると言われています。巨石群が点在している村もあり、儀式用または祭壇だったと思われる石造りのテーブルが数多く残っています。

ニアス島の人々は、もともとアニミズムを信仰していました。亡くなった祖先の霊は別の世界で生き続けており、その魂が宿るところとして石像が作られたのです。ニアス島の人々は「祖先は石像を通して語りかけ、日々の生活に関してアドバイスし、危機や災害から村を守ってくれる」と信じ石像を崇拜しました。

人々が身近に感じる石碑またはモニュメントに教訓を刻むことについて実施したアンケート



写真2
広場で行う石飛び（パウオマタルオ）
〔高藤洋子 撮影〕



写真3
村の広場にある石塔（パウオマタルオ）
〔高藤洋子 撮影〕

調査では、回答者の93%が防災石碑あるいはモニュメントを作ることは可能であると考えていました。これも昔からニアス島では石に様々な情報を刻む習わしがあり、防災石碑の建立を自然に受け止めることができたことに由来すると言えます。この防災石碑を建立する計画については、ただ今現地の博物館や学校、そしてコミュニティと話し合いを重ねています。

今後の課題としては、伝統文化を活用した防災歌や防災石碑、或いはモニュメントで防災意識がどの程度向上し、また維持されるかについても継続的に調査や研究をしていきたいと考えています。

まとめますと、防災・減災のためには、地域の歴史や文化に配慮した防災手法が不可欠で、防災意識を常に持ち続けるためには、先人たちの経験や知恵を日常生活に溶け込ませ継承していくことが大切であると言いたいのです。

日本とインドネシアは歴史も文化も異なる国ですが、両国はともに地震や津波の多発国です。この研究の過程や成果は、今後の日本の防災教育だけではなく、日本、インドネシア両国、また全世界の防災・減災教育に関する共通の課題に対しひとつの方向性を与えたように思います。

私は今月初めの5月7日にインドネシアから帰国したばかりですが、バンダアチェでの直近のレポートをひとつ皆さんにお伝えしたいと思います。2004年のスマトラ沖地震大津波によって、バンダアチェの陸に打ち上げられた発電船については皆さんご存じの方が多いかと思いますが、今ではその周辺が災害遺構の公園となっており、国内外から多くの人々が訪れています。最近この公園内に新しい時計台のモニュメントが建てられました（写真4・5）。津波発生の時刻が記された時計台には犠牲になられた方々のお名前が刻まれています。そしてその時計台の後ろにある銅板には津波の様子が描かれています。これは地域の住民たちの要望によって建てられたものです。地域の方々の意向が反映され、銅板の絵には苦しむ人々の姿は描かないように配慮されました。

聞き取り調査によって、「2004年の地震発生の際に何が起こったのかという事実と歴史を後世に伝えたい、災害に備えてほしい。」という地域の人々の気持ちがモニュメントに表現されたことがわかりました。災害経験とその教訓を風化させないように努力しているバンダアチェの人々の防災意識を感じました。

また、国際防災協力のひとつとして、インドネシアにおいて日本主導の防災通信システムの導入に向けたプロジェクトも始動しています。そのプロジェクトには、津波警報などを全国の



写真4 時計台のモニュメント

〔高藤洋子 撮影〕



写真5 銅板に描かれた津波絵

〔高藤洋子 撮影〕

モスクに設置されたスピーカーを活用して住民に伝達する計画も含まれており、他のイスラム諸国も関心を寄せています。このように、国際防災協力もその土地の日常生活に溶け込んだものであることが大切だと考えています。

最後になりましたが、シムル島とそこで100年以上にもわたり伝承されてきた「Smong」、そして「Smong」をヒントにニアス島で創作された伝統文化「Maena」を活用した防災歌とダンスを紹介したいと思います。

写真6は空から見たシムル島の様子です。島の中部から北部にかけてはパーム畑が広がっています。海岸も大変美しく自然が豊かな島で、子どもたちは自然に包まれ、のびのびと育っています。島にある唯一の幹線道路が**写真7**です。地震発生の際には多くの人が山の上に避難しました。

写真8は「Smong」をうたっている様子です。「Smong」はシムル語で「津波」を意味します。その内容は、要約すれば「地面が動いたとき、また海面が下がり、潮が引いたときには速やかに高台に避難しなさい」というものです。「Smong」は島に伝わる「Nandong」と呼ばれる叙事詩によって受け継がれたこともあれば、子守唄に形を変え、美しいメロディーとともに代々歌い継がれてきたときもありました。シムル島の住民たちは「Nandong」を集会の際に歌ったりする他に、田植えや刈入れ時期の休憩時に、また漁業に携わる者は漁の際に口ずさんだりしました。

写真9は、田植えの際に孫に子守唄を歌いながら「Smong」を伝えている様子です。田植え



写真6〔高藤洋子 撮影〕



写真7〔高藤洋子 撮影〕



写真8〔高藤洋子 撮影〕



写真9〔高藤洋子 撮影〕

をするお母さんの横にある小屋では、おばあさんが子守をしながら「Smong」の話を伝えています。幼い頃から津波の怖さや地震発生の際の対処法を伝えていることがわかります。

一方ニアス島では防災の歌がニアス語で歌われています。ニアス島での新しい取り組みとして、ニアス島の伝統的な歌と踊りである「Maena」を用いた防災歌を作り、全島で普及する活動をしています。子どもたちが楽しみながら災害時の対処法を学ぶことができます(写真10)。

ニアス島の学校の先生方、児童、生徒たちが話し合っ考えた防災の歌は、次のような歌詞でした。「地震が起きたらどうしましょう。地震が起きた時には安全で快適なところを探しましょう。ふるさとの歌「Maena」を歌ってみましょう。こうして皆が出会い、集ったときに。さあ「Maena」を踊りましょう。楽しく心が弾みます。地球そして地球上にあるもの全ては神様が造ったものです。地震が起きた時には家にいる時も学校にいる時もすぐに避難しましょう。海岸近くにいる人はみんな注意しましょう。海の水が引いたならそれは津波の前兆です。より高い所に逃げましょう。津波が来ない安全な場所を目指して逃げましょう。高い山のみもと、山裾に行かないようにしましょう。土砂崩れに巻き込まれると命を落とすことさえあります。



写真10 Maena を活用した防災ダンス

〔高藤洋子 撮影〕

大きな通りには電柱などにも気をつけましょう。倒れて人を傷つけることがあるかもしれませんが、地震が起きたその時にももし調理をしていたなら安全を期して火を消しましょう。ふるさとの「Maena」、今回はここまでにしましょう。また次の機会に続けましょう。」歌には地震や津波が起きた際に注意すべきことが多く取り入れられています。

最後に、シムル島で2004年の大津波発生以降に新しく生まれたポップス調にアレンジされた「Smong」を紹介します。「Smong」の伝承の多くは祖父母や両親を通して各家庭で伝えられていましたが、2004年の大津波発生以降は学校で先生から教わったり、村の集会の際に歌われたりすることでも語り継がれており、今なお普及が続いています。島の人たちはさらに次世代に「Smong」を語り継ぎ、命の大切さや、いざというときの判断や行動がどんなに大切なものかを伝えようとしています。

ご清聴とご視聴をいただきありがとうございました。

弘末：高藤さん、どうもありがとうございました。貴重なご報告でありますので、時間は過ぎておりますけれども、ご質問を1人2人お受けしたいと思えます。

フロアA：非常に参考になるお話をありがとうございました。私は91年に起こりましたバングラデッシュのサイクロン4がきっかけで、いろいろ災害の件に携わらせていただいております。今お聞きしたお話の中で、地震があり、でも津波には至らなかったというとき「普及」がどうなっているのか非常に気になりました。また、スマトラの3か月後にニアスでまた大きな地震があったとき、3か月前の直近のものが教訓になった要素があったのでしょうか。

高藤：「地面が揺れたら、すなわち地震が発生したらすぐに津波を想定して逃げましょう」ということで防災教育を広めています。つまり、「揺れが来た段階ですぐ逃げましょう。津波がなければそれはそれでよかった」という考え方で防災教育を進めています。

残念ながら 2004 年 12 月に発生した地震と津波は、3 ヶ月後の 2005 年 3 月にニアス島で発生した地震の際の教訓にはなり得ませんでした。さらに多くの被害者が出ています。

フロア B：マエナが学校の中で行われているということですが、実際学校教育の中でどの程度恒常的にできるような態勢になっているのかということと、一方で防災法ができたということでこれが後々地域に広まってくると思うのですが、中央からの政策が地域に広がると、シムル島のようなその地域の濃い文化が廃れてしまうのではないかと。100 年後を考えたときに、中央から来るものと現地に残っている文化の融合をどう考えるべきかということをお聞かせ願えればと思います。

高藤：最初のご質問に対してお答え致します。ニアス島では教育局から「Maena」を活用した防災教育を実施し、普及することに推薦をいただいています。最初はニアス島の中心地のグスンシトリ市にある小学校から始めました。ニアス島の全県を回って小学校、中学校、高校そして専門学校においてその活動範囲を広げており、現在に至っています。それぞれの学校でオリジナルの防災歌ができつつあるところです。今度 8 月に私が赴いた際にはその防災歌をアーカイブスとして収録し、ニアス島はもちろんのことインドネシア、また日本にも防災教材として取り入れたいと考えています。

弘末：中央政府との防災文化の関連でございますが、これはなかなか大問題でありますので、後ほどパネルディスカッションの方で取り上げていただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

参考文献

Badan Pusat Statistik Provinsi Sumatra Utara (2008) “Sumatara Utara dalam Angka”

インドネシア国家防災庁 (BNPB) 発表資料

高藤洋子 (2012) 『災害経験を語り継ぐ防災教育の実践—インドネシア・ニアス島の事例を

中心に—』WORKING PAPERS No.15 立教大学アジア地域研究所

高藤洋子 (2013) 『災害経験伝承が防災教育に果たす役割

—インドネシア・シムル島における事例を通じて—』社会貢献学会

資料3 「Smong」

<p style="text-align: center;">Smong 原語はシムル語 () 内はインドネシア語 (作詞：Moris Messasilae)</p>	<p style="text-align: center;">Smong スモン 津波 (日本語訳：高藤洋子)</p>
<p>Smong dumek-dumek mo (tsunami air mandimu) Linon uwak-uwakmo (gempa ayunanmu) Elaik keudang-keudangmo (petirkendang-kendangmu) Kilek suluh-suluhmo (halilintar lampu-lampumu)</p> <p>Enggel mon sao surito (dengerlah suatu kisah) Inang maso semonan (pada zaman dahulu kala) Manoknop sao fano (tenggelam suatu desa) Uwilah da sesewan (begitulah dituturkan)</p> <p>Unen ne alek linon (gempa yang mengawali) Fesang bakat ne mali (disusul ombak raksasa) Manoknop sao hampong (tenggelam seluruh negeri) Tibo-tibo maawi (secara tiba-tiba)</p> <p>Angalinon ne mali (jika gempanya kuat) Oek suruk suali (disusul air yang surut) Maheya mihawali (segeralah cari tempat) Fano me senga tenggi (dataran tinggi agar selamat)</p> <p>Ede smong kahanne (itulah smong namanya) Turiang da nenekta (sejarah nenek moyang kita) Miredem teher ere (ingatlah ini semua) Pesan navi-navi da (pesan dan nasihatnya)</p>	<p>津波・・・それは君たちの水浴びの水 地震・・・それは君たちのゆりかご 雷・・・それは君たちの太鼓の音 稲妻・・・それは君たちのともし火</p> <p>さあ、皆さん 話を聴きましょう。 むかしむかし・・・ 海の底の村で 語り継がれた話です。</p> <p>揺れ動く地震に続いてやってきた とてつもない大きな波・・・。 あっという間に 村は海の底に沈んでしまいました。</p> <p>もしも強い地震が来たならば・・・ 海の水が引いて行ったならば・・・ とにかくまずは高いところを探しましょう。 自分達の身を守るために・・・。</p> <p>この Smong と名付けられた(津波の)お話は 私たちのご先祖様から聞いたお話・・・。 よく覚えておきましょう。 この言い伝えを守りましょう。</p>

※「Smong」の歌詞をはじめ、図や文章の無断転載をお断りいたします。

引用の際には必ず出典を明記ください。

資料4 「Smong」に見る日本へのメッセージ PANTUN NANDONG SMONG (TSUNAMI)

(歌詞聞き取り調査実施：2011年8月)

PANTUN NANDONG SMONG (TSUNAMI) 原語はシムル語 (作詞 Djuliman)	Smong (津波) (日本語訳 高藤洋子)
Sumengen bano mangida linon Huru hara ata bak kampong Mataut ata mangida smong Bakdo nga tantu bano kumodong	周りが静かになり地震が起こりそうな気配です。 村の人たちがパニックになりそうです。 津波が来ることが心配なのです。 どこに逃げたらよいか、わかっていないのです。
Huru-hara ata bak kampong Mataut smong mangida mali Molo nga tantu bano kumonog Delog sibau dok tango basi	村の人たちはパニックになります。 津波が起こることが心配です。 でも(今は)村の人たちはどこに避難するかを既にわかっています。タンゴ・バシにあるシバウ山です。
Hulu nai niba alek slek Orang mananam niba asila Smong ek Indonesia 2004 Afel ata bakduon difuha	レモングラスで魚を煮ます。 おいしくなるように塩を加えます。 2004年にインドネシアで津波が起きました。 多くの行方不明者が出ました。
Abek anak alu tenek buluh Diferet alek wae fala Tsunami ek Jepang 2011 Ata bak bano tambah susah	竹垣から竹をとってきて 赤い色をしたヤシ(ラタン)でくくりました。 2011年に日本で津波がありました。 多くの人がとても苦しみました。
Cubo-cubo mananem lamon Siuk mafo aurefanta Luma baeng niabek smong Mamaal bantuan tenek ata	ヤシを植えてみてごらん下さい。 将来、私達の生活に役立つに違いありません。 津波で家が流されました。 他の人々からの助けを待っています。
Ditanem lamon dibalek pandan Siuk alefo diba sinasah Samo mamohon menek Tuhan Meisek amon daifak tafuha	タコノキ(マングローブ)の後ろにヤシを植えます。 将来、それを編むことになるでしょう。 神様にお祈りしましょう。 将来、被害に遭いませぬように。。

※「Smong」の歌詞をはじめ、図や文章の無断転載をお断りいたします。

引用の際には必ず出典を明記ください。